

関係を診ることで臨床はどう変わるか

小林 隆 児

乳幼児医学・心理学研究 19 (1) : 1 - 13 (2010)

Jpn. j. Med. Psychol. Study Infants

2010年6月

日本乳幼児医学・心理学会

会長講演

関係を診ることで臨床はどう変わるか

小林 隆 児*

はじめに

今回の第19回大会の特別企画として「アタッチメント、甘え、関係性」を設定しましたが、すでに第12回の本学会でもアタッチメントが取り上げられています。私もずっとアタッチメントに強い関心を持ちながら、関係をみるというスタンスを一貫して取ってきました。そこで今回の講演のタイトルを「関係を診ることで臨床はどう変わるか」としてみました。私自身がこれまで経験したことを土台にして、そこから何を学んだか、そんなことを中心にして話を進めていきたいと思えます。本日は、私が大変尊敬申し上げている小倉清先生と鯨岡峻先生をお招きし、お二人を前にして話すことになりましたので、随分と緊張しております。

私は先ほど司会の本城先生のご紹介にありましたように、母子ユニット(MIU)での臨床を15年間積み重ねてきました。90例余りの親子と出会い、60例ほどの親子の関係臨床に取り組んできましたが、本日はそれにはあまり触

れません。

最近、児童・思春期から成人まで幅広い精神科臨床を行う機会に恵まれ、この半年で随分とたくさんの患者さんを診てきました。その中で多くのことを学んでいるのですが、これまであまり診ることが無かった患者さんと接する中で、私がMIUで学んだことが何だったのかということに改めて強く感じるようになりました。そんな思いを強くしたものですから、本日のタイトルのような次第です。

MIUでは1歳から4、5歳までの子どもたちとその養育者との関係について、細かく見てきました。そこでは贅沢なことにビデオカメラを3台も駆使して、観察しながら臨床に取り組んできました。90余例の親子関係の機微について、新奇場面法(SSP)という観察法を用いてみてきました。そこで私が何をみてきたか振り返ってみますと、子どもたちが見せる多様なアンビヴァレンスの様相をつぶさに観察してきたということになるのではないかと思います。臨床診断では自閉症およびその周辺の子どもたちということになりますが、そうした子どもたちと養育者との関係にどのような困難が潜んでいるのか、そのことに関心を注いできましたので、結果的に親子間にみられるアンビヴァレンスが具体的にどのような形で現れてくるのか、そんなことを観察してきたことになるのではないかと思います。それらの親子関係がどのような次元

What kind of changes the clinical practice from the viewpoint of relationship does make?

* 大正大学人間学部臨床心理学科

[〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1]

Ryuji Kobayashi: Department of Clinical Psychology, Taisho University School of Human Sciences, 3-20-1 Nishi-sugamo Toshima-ku, Tokyo 170-8470 Japan

で、どのような要因によって動いているのか、そんなことを考えながら、「甘え」のアンビヴァレンスの多様な姿を目にしてきたのだと思います。そんな子どもたちのこころの動きを、自分の気持ちを重ねるようにして観察してきました。

その後の児童思春期から成人の患者を診るようになって、改めてこれまでのMIUでの体験が私にとってとても大切なものだったのだと痛感するようになりました。彼らと面接をしていますと、MIUで観察してきた親子の間で起こる関係の機微と同じようなことが起こるのだと実感するようになったからです。MIUでの観察は、子どもが養育者に対して具体的にどのような言動を取るか、生々しい形で目の当たりにすることができたのですが、児童思春期や成人の患者さんとの面接場面でも私との間、あるいはそばにいる養育者との間で、同じようなこころの動きをとらえることができるのだと実感したのです。勿論、MIUでの場面のような客観的な行動としては誰にでも観察することはできませんが、私自身の体験としては同じような心の動きとして捉えることができるようになったのです。

自閉症スペクトラム障碍に みられるアンビヴァレンス

まずは幼児でアンビヴァレンスがどのように表れるか、MIUを離れてから経験した事例を通して考えてみましょう。

A男 3歳6ヵ月 自閉症

つい先日遊戯室で出会った3歳半の子どもですが、一見すると、まるで母親の存在など気にしていないかのようでした。部屋にある遊具をひとりですべて取って過ごしていました。私はここでSSPを簡便な形にして、母子分離と再会場面を作ってみようと考えていました。私の合図で母親に3分間ほど部屋から出て行ってもらうように説明しました。いよいよ、母親に出て行ってもらうと合図を送ろうとした矢先に、

なぜかA男はさり気なく母親の方に近づいて身体を触り始めたのです。先ほどの私の話を聞いていたからなのでしょう。母親が出ていくのを引きとめるかのようでした。私は合図を送るタイミングを失ってしまいました。しばらく様子をみることにしました。するとA男はまもなく母親から離れていきました。そこで、私は母親に退室してもらうように合図を送りました。母親はすぐに出ていきましたが、その時A男は表立っては後追いをしたり、泣いたりすることはなく、まるで母親が出て行くのを気づいてないかのように、それまでと同じように玩具を手で扱っていました。

3分経過したので、母親に入室してもらったところ、A男はしばらく母親を無視するかのようには振舞っていたのですが、しだいに母親のそばを歩きまわりながら、様子をうかがうようにして母親に背を向けて近づき、母親の膝の上に座ったのです。自分の母親への思いを悟られまいとしてさり気なく近づき、ついには母親に抱かれるように行動したのですが、その時驚いたことに、A男は思わず深いため息をついたのです。それまでの息詰まるような緊張からやっと解放されたとの思いがこのため息によく現われていたのですが、母親も気づいていました。そこで私は、A男が母親に対して、「甘え」の気持ちを抱きつつも接近できず、いかに気にして行動していたか説明したのですが、ここで母親も子どもの繊細な思いを実感することができたのです。母親は部屋の外で待っている間、自分がいなくなってもまったく気にしないだろうと思っていたと言いますから、その驚きはとても大きかったのだと思います。

これがきっかけとなって、その後母親はA男の日頃の行動の背後にどのような気持ちが働いているかを感じるように心掛けるようになりました。その結果、母子関係は劇的な変化を遂げていきました。

このように子どもたちは一見マイペースで振

る舞っているように見えるのですが、実はそうではなく、養育者の存在をとてにも気にしつつも、無視するような態度を取っているものです。ここに子どもの養育者に向ける「甘え」のアンビヴァレンスをみてとることが大切だと思います。アンビヴァレンスは多様なすがたを見せるのですが、それはなぜかと言うと、アンビヴァレンスを生み出す背景そのものが実に多様であるからなのです。

この例に端的に示されているように、当初子どもを発達障害という個の問題として捉えていた母親が子どもの自分に向ける生々しい気持ちのありようを実感すると、それが契機となって、子どもの一見奇異に思えた行動が自分との関係の中で生まれていることに気づき、以後子どもへの思いを強く感じるようになっていきます。そのことによって親子関係に劇的な変化が起きていくことになるのです。

多様な病態にみられる アンビヴァレンス

先の事例は自閉症スペクトラム障害ですが、他の病態でも同じようにアンビヴァレンスを認めることができます。そのような事例をいくつかお示ししましょう。

B 男 6 歳 11 ヶ月 (児童期) 統合失調症

周産期から乳児期にかけて特に異常はありませんでしたが、始語は1歳半と若干遅かったそうです。人見知りは4ヶ月頃にはみられたといえます。おむつは2歳頃にとれました。乳幼児期早期から風邪をひきやすく、こじらせて肺炎になっては入退院を繰り返していました。育てるのは大変だったそうです。印象深い話として、2歳になる少し前、弟の出産で母親が入院し、1週間母子分離を体験したのですが、母親が退院した時には、母親のもとへ行くことを泣いて拒み続けたそうです。B男の母親に向ける感情の繊細な動きを感じさせる話です。しかし、幼稚園時代は特に気がかりなことはなかったそう

です。

その後、小学校に入学。就学後は喜んで登校していました。ただ、顔見知りの子とばかり遊んでいました。夏休み、家族で海水浴にでかけ、危うくおぼれそうになって大騒ぎとなったことがあるそうです。この出来事が関係したかどうか定かではないのですが、9月になると、口元にチックが出現してきました。さらに眉間に皺を寄せて、ちょっとした嘘をつくようになったそうです。

11月、急に口数が減ってきました。ひとりでにやにや笑うようになってきました。〈いらいらするな!〉と独り言のようにして激しい口調で言うようになりました。家の中を歩き回る、ぼ〜としている。好きな絵描きや読書もなくなり、家族が語りかけても反応が乏しくなってきました。時折、空を掴むような行動も出現しました。朝の着替えもなくなりました。寝つきが悪くなり、目覚めも早くなりました。このように生活全般にわたってだらしくなっていました。

12月、両親は担任教諭からB男について気になることを指摘され、精神科の受診を勧められ、私が紹介されました。最初の2回は母親のみの相談でした。

幼児期のエピソードからB男には母親に対して甘えをめぐる強いアンビヴァレンスが働いていることが強く示唆されましたが、そのことをセッションの中でまざまざと見せつけられたのは、B男と初めて会ってから1カ月半後のことでした。

第7回のセッションでみられたB男のアンビヴァレンス

広い遊戯室でしばらく両親、B男と一緒に過ごしていましたが、B男は両親と少し離れたところのソファに横になったり、座ったりして、こちらの様子をじっと見つめていました。両親と私が話している様子をうかがっているようにみえました。そこで私は両親と、離れて座って

いる B 男の気持ちについて考えることにしました。幼児期のことを思い出してもらいました。すると両親はともにそれに気づき、以前からこの子は兄弟が下にふたりいるために遠慮してきたのではないかと話し始めました。私は B 男の存在を気にかけ、彼に時折視線を向け、ソファの上でごろんと横になっている B 男の手をさり気なく触りながら面接を続けていました。しばらくして、ソファに座っている B 男に向かって両手を広げて B 男を受け止める姿勢で〈おいで〉と誘ってみました。すると B 男は腰を浮かしてこちらに来たような仕草をとったのですが、驚いたことに、すぐに B 男は身体を止めて凍り付くように固まってしまい、まもなく何事もなかったかのようにソファにすんと落ちるようにして座り直したのです。

私はこの時の B 男の反応に非常に驚くとともに、彼のアンビヴァレンスの強さを再確認しました。以後、私は彼のアンビヴァレンスをいかに緩和していくかにこころを砕き、両親にもことあるごとにそのことに気づいてもらうとともに、彼のアンビヴァレンスを刺激しないために、こちらから意図的で指示的なことばを極力避けて、さり気なく彼の気持ちを受け止め、何をやっても大丈夫だよと彼が思えるように応じてほしいと助言していきました。そこに子どもたちの甘えに対する罪悪感とともに、強い侵入不安を感じとっていたからです。

幸い、両親はこれまで B 男に対して十分に気持ちをくみ取って相手をしてやれなかったという反省を述べ、私の助言を素直に受け止めてくれました。

半年ほどすると、B 男は再び登校できるまでに回復していきました。

C 子 13 歳 9 ヶ月（中学 2 年生）（前思春期）
うつ病

胸苦しい、胸が締め付けられる感じがするという主訴で母親同伴による受診でした。両親、

兄 2 人、C 子の 5 人家族で、家族同士はとても仲がよく、両親とも子ども思いでやさしい人です。C 子はまじめでおとなしく、いろいろとひとりで考えることが多い子どもです。思ったことをすぐに口に出す人を見ていると少しうらやましく思うともいいます。

もともと人見知りの強い子でした。幼稚園年長組の頃から、胸が苦しくなると訴えることがあったそうです。しばらくは何もなかったというのですが、小学 4 年になると、友人関係などで悩み、再び胸苦しいと訴えだしました。友達関係でつらいことは次のようだと述べています。

「小学 4 年の時、友達の中で仲良かった子が自分に急に冷たくなった。しかし、翌日には再び（何もなかったように）にこにこして自分に寄ってくる。自分に対する態度がこんなに変わる人がいて驚いた。当時はそんな性格の人だと思って気にしないようにしていたが、不安なことやストレスが多かったりすると、胸苦しくなるようになった。」

中学に入って再び同じような苦しさを訴えるようになってきました。2 年生になって特に苦しいといえます。表だって目立った変化はないというのですが、胸苦しきの体験について「胸からキューと音がする。おなか痛むときに音が鳴る感じが胸で起こっているようだ」と表現します。「昼が近づくと胸が苦しくなる。給食の時間に多い。給食中はほぼ毎日のように起こる」といいます。

中肉中背の女の子で、初潮は未だですが、胸の膨らみは認められます。いまだ顔には幼さが同居していますが、とても素直な態度で、行儀よく座っています。しかし、表情は暗く、顔の右半分を隠すようにして前髪を垂らしています。今の気持ちを聞いても、「何を話してよいかわからない」と漠然とした気持ちであることを述べます。「人に話す前にいろいろと考えるタイプで気を使ってしまう。相手が強い人だとなかなか思ったことを言えず、後悔することもある。中学に入ってからひとりで泣いていることがあ

る。悲しくなることがある。相手に対して、特に大切な友達に対してつれない態度をとっていないか、とても気を使っている。吹奏楽部の人付き合いで、どのように相手をしてよいかかわからず苦勞している。今にも悲しくて泣きたくなる気分だ」といいます。

交友関係にみられるアンビヴァレンス

C 子の話を聞いて、最初に注目したのは、C 子の対人関係の悩みがどのようなものかということでした。小学 4 年の時の話です。「友達の中で仲良しだった子が自分に急に冷たくなった。しかし、翌日には再び（何もなかったように）にこにこして自分に寄ってくる。自分に対する態度がこんなに変わる人がいて驚いた」といっています。友達に対してつれない態度を取ったと思ったら、急に親しそうに接近してくる友達の態度に困惑している姿が思い浮かびますが、この友達との関係はアンビヴァレンスの特徴をよく描き出していると思います。C 子自身も中学に入ってから、友人関係の中で相手、それもとりわけ大切な友達に対してつれない態度をとっていないか、とても気を使うようになったといっています。対人関係でのこのような C 子の悩みは、自分自身が先の友人と同じようにアンビバレントな態度をとっていないかどうかが、とても敏感になっているということではないでしょうか。友人の態度にみられるアンビヴァレンスにとっても困惑したのは、実は C 子自身の中にも漠然とですが同じような心の揺れを感じ取っていたからなのでしょう。自分とは関係のないものとして割り切って捉えることができなかったのは、友達の姿に自分の心が映し出されていたからではないかと思われるのです。

このような話を母親と同席の面接で語っていったのですが、すると次第に母親自身も実はこの子と同じ時期に、友人との関係で同じように悩んでいたことが語られるようになってきたのです。つまりは、母親も前思春期に友人関係で強いこころのゆれ、つまりはアンビヴァレンスに

戸惑っていたことが分かったのです。すると母親は子どもの気持ちがとてもわかるようになり、C 子の心細い気持ちをしっかりと受け止めていくことができました。次第に C 子は立ち直り、好きな楽器の練習を父親と一緒にするまでに回復していくことができました。

これまでの話を振り返ってみますと、最初は自閉症スペクトラムの子もたちとその養育者との間で着目してきたアンビヴァレンスの問題が、どのような事例においても同じように捉えることができ、それに焦点を当てて治療をすることによって、新たな展開が起り、親子関係が修復され、子どもの状態も回復していくことがわかります。

このようにみていきますと、従来の発達障碍という診断概念は私の臨床においてほとんど意味をなさなくなってきたというのが正直な気持ちです。

〈子—養育者〉関係の見立て

つぎに、「関係を診る」とはどういうことか、具体的に話していきたいと思います。

D 男 5 歳

乳幼児期から過敏な子どもで、母親は養育に随分と苦勞してきたそうです。ことばそのものに目立った遅れはなかったのですが、身のこなしがきこちない、視線が合にくく、なんとなくコミュニケーションがしっくりこないという感じをずっと持ち続けていたそうです。おそらく高機能広汎性発達障碍と診断される事例でしょう。

母親面接で感じたこと

私が面接をした時、D 男は部屋の半分ほど使って担当セラピストと遊び、私は母親面接を残りの空間を使って行うことになりました。母親はきちんと対面して、こちらの質問に丁寧なことば使いで微に入り細に渡って話をしていま

した。あまりの緻密すぎる話には、私は母親の話に分け入ることが容易ではないな、と感じていました。

D男の幼い時からの話を聞き始めたのですが、母親の話は次第に熱のこもったものになっていきました。私はその時気になったのは、どうも母親には懸命に自分を守ろうと自己弁護しているともいえるような、気の張りつめた息苦しさを覚えるようになりました。

その前にD男のこれまでの様子を聞いていく中で、周囲に対してびくびくしながら生活し、母親を頼りにしてきたのではないかと感じたので、そのことを母親に投げかけてみました。すると、子どもの就学相談の時、学校側から冷たくあしらわれて傷ついた体験があることが語られ始めました。それから母親はあまり人に頼らず、自分に落ち度がないように、しっかりとしなければという思いになったといえます。

母親は身を乗り出さんがばかりにして、目を見開いて、自分の思いを一所懸命に語り続けました。私は母親のあまりに熱い思いに圧倒され、飲み込まれるような不安さを感じていました。母親のこのような懸命さは子育てにも強く反映していました。D男に対して一挙手一投足にわたって落ち度のないように、他人様に迷惑がかからないようにと声かけをしていたのです。

D男は一見するとセラピストに対してサービスピリット旺盛に語りかけながら楽しそうに遊んでいましたが、実はずっとこちらの面接の様子が気になり、アンテナを張り巡らし、遊びそのものに気持ちが集中していないのが見て取れました。

遊びの中で〈子ども一養育者〉関係が変わる

このように母子ともども痛々しいほどに懸命に生きているのですが、その息苦しさがどこからくるのか、そのことを解き明かしていくことが本事例の関係支援を考えた時、大切なポイントではないかと想像していました。そこでこの面接でなんとか少しでもそのところを和らげる

ことはできないかと考え、母親にこれまでの生き方について肯定的に取り上げ、かつ大変な思いを汲み取りながら、「これまでお母さんは遊びのないハンドルで車を懸命になって運転してこられたように感じますね」と投げかけてみました。母親はまもなく涙ぐみ始め、少し肩の力が抜けたように感じました。

その時です。それまで母親から離れてセラピストと遊んでいたD男が、急に私たちが面接している場にボールをはずみで放り投げたのです。私たちは驚き、母親はすぐに注意しましたが、私は自分に注目してほしいという注意喚起行動だとすぐに気づき、D男の気持ちを受け止め、おどけたようにして大袈裟に驚いて見せました。すると、母親の傍に寄って、まとわりつくようになったのです。

ここで私が「これまでお母さんは遊びのないハンドルで車を懸命になって運転してこられたように感じますね」と母親に語ったのは、母親と私との関係の中で感じたものです。間主観的に把握したものと言っていいでしょう。おそらくは同じようなことがD男と母親との間にも起こっているのでしょう。息詰まるような緊張感が私のこの介入によって急に解け、母親のそれまでの構えが変化していきました。それを私は肌で感じていましたが、同じことをD男も感じたに違いありません。D男が急に母親にまとわりついたのは、それまでの母親の近付き難い雰囲気急に薄れていったからだろうと思うのです。

「関係を診る」ということは、このように相手との間で間主観的に捉えることですが、それは私自身の身体を通してモニターしたものです。それを可能にしているのは私自身です。「関係を診る」ということは、自らの身体を通して捉えることであって、決して客観的に他者同士の関係を観察して分析するような作業ではありません。

「関係を診る」とき、そこで強く働いているのは、これまで私がことあるごとに取り上げていた原初的知覚あるいは力動感 vitality affects というものであることがわかります。相手、あるいは自分の気持ちの動きを感じ取ること、それを可能にしているのが原初的知覚だということです。

土居先生の主張

このように考えていた時に、私は最近亡くなられた土居健郎先生の『臨床精神医学の方法』（岩崎学術出版社）という本を手にする機会がありました。今では土居先生の遺書となったものですが、そこで土居先生は精神療法の腕を磨く上で大切なものとしてメタファーを理解することの大切さを述べておられます。

これまでに治療してきた多くの患者の中で印象的であった一人として、勘繰り（土居先生は妄想を日常語でこのように表現しています）を20数年間にわたって一貫して訴え続けていた統合失調症の女性を取り上げ、以下のように語っています。

……最近患者がガラッと変わって、勘繰りをしなくなったんです。そして、「先生、もうあんまり考えなくなりました」といって、妄想を訴えなくなったんです。それで、一体どういう心境の変化かと聞いたところ、患者が笑いながら、「お餅が焼く網にくっつくでしょ。そのくっついている網から餅がはなれたような気持です」とニコニコ笑いながら答えました。この人なんか、一体何が効いたのかわからないし、何もなくても20年以上付き合っていると治るかもしれない。まあよくわからない。……（中略）……妄想が取れるのをお餅が網から取れるような感じがするというのは、これはすごいmetaphorです。暗喩、たくまぎる比喩的表現です。これがわかる人は、精神科の医師としてうまくなると私は思うね。精神療

法もうまくなる。metaphorは因果関係じゃないんです。identificationと関係がある。metaphorによって事柄を理解するんですね。たとえば、精神分析的な治療の場合、転移ということをよく聞くでしょう。たとえば子どものときに親との関係の中で起きたことが、長じて、たとえば医者に対して同じことが転移として出てくるという。これはmetaphorなんです。論理構造がmetaphorなんです。ですから、metaphor的な捉え方ができるようになれば、間違いなく、いい精神科の医者になれると思う。……（土居，2009，pp.174-175より）

私はこの土居先生の主張を目にして、大変勇気づけられました。土居先生がなぜ精神療法の腕を磨くこととメタファーの理解が関係するのか、その点について本では詳しく論じていないのですが、私が先ほど取り上げた〈子-養育者〉関係で感じたことを言葉にして母親に語った内容はメタファーそのものであることがわかります。「関係を診る」こと、そしてそれをメタファーで表現すること、それが〈子-養育者〉関係を動かす力となっているのです。

「関係を診ること」とメタファー

では「関係を診る」こととメタファーはどのように繋がっているのでしょうか。私が先の母親との面接で間主観的に感じ取ったこと、それを可能にしているのが原初的知覚だといいましたが、このような知覚体験がメタファーとしての表現を生み出しているのです。このようにみていくと、原初的知覚を通じた体験過程が精神療法の面接においてとても重要なことがわかってきます。おそらくはこのことを土居先生は指摘されているのではないかと思うのですが、私がこれまで述べてきたことが「甘え」をめぐるアンビヴァレンスであったことと繋ぎ合わせると、「甘え」にまつわるころの動きを感じ取るこ

とができるのも原初の知覚の働きによっていることがわかるのです。

土居先生がなぜメタファーを取り上げたかという、転移現象とメタファーは構造的に同じであるからだと述べています。乳幼児期に体験した親子関係の質と同じものが現在の患者と治療者の間にも立ち上がる、これが転移現象ですが、これとメタファーが同じ構造を持つということは、そこに原初の知覚がともに重要な働きをしているからだとすることができると思うのです。「甘え」という、人が人に対して抱く感情の動きを感じ取ることができるのは、原初の知覚つまりは力動感だということを考えると、原初の知覚に依拠したコミュニケーション世界、すなわち原初のコミュニケーションでの体験だということなのです。私がこれまで取り上げてきたアンビヴァレンスを感じ取ることができる原初のコミュニケーション世界は、人間関係の原初の段階を示していますので、そこでの関係の質を考えていくことが、精神療法において極めて重要であるといえましょう。そんな理由から、土居先生はメタファーを理解することの重要性を強調されていたのではないかと思うのです。

子どものアンビヴァレンスは なぜ生まれるか

つぎに、子どもにみられるアンビヴァレンスがなぜ生まれるのか、治療経過の中でどのように明らかになっていくか、事例を通して考えてみることにしましょう。アンビヴァレンスが決して子どもの中に自然に生まれてくるようなものではなく、その背後に見え隠れする養育者のアンビヴァレンスとその歴史的背景が関係していることをみていきたいと思ひます。

E 男 4歳0ヵ月 自閉症

主訴 ことばの遅れ、ひとり笑い、こだわり。
発達歴・現病歴 胎生期は特に問題はなく、満期安産でした。しかし、乳児の時から身体は弱

く、風邪をこじらせては肺炎になり、喘息気味で、生後1年はほとんど寝てばかりでした。そのためもあってかあまり母親になつかず、どことなく視線も合いにくく、もの静かでおとなしいという印象の強い子だったといひます。人見知りがなかったために、手もかからず子育ては楽だったといひます。家業の手伝いもあったので、仕事ができ助かったというのが正直な気持ちだったそうです。誕生前にはハイハイをせずいきなり歩けるようになりました。1歳6ヵ月健診では特に異常を指摘されることはなく、2歳の時、保健所で初めてことばの遅れを指摘されました。ことばはなかなか出てこなく、2歳半になってようやく発語がありました。3歳健診で、知的障碍児施設に通うことを勧められたのですが、当時は両親ともさほど深刻に思わず、なんとかなるのではと軽く考えてどこにも通わせなかったといひます。

3歳過ぎるころから、タオルケットを始終お守りのように持ち歩くようになり、それを取り上げると火がついたように激しく泣くようになりました。あまりにもかんしゃくが激しいので、さすがに両親も心配になり、地域のこども病院小児科を受診し精査を受けましたが、発達の遅れ以外に特に異常は指摘されませんでした。発達検査では2歳程度と言われたそうです。

その後、次第に自分ひとりで遊ぶことが増え、そんな時にはひとりで自分の世界に没頭してぶつぶつとつぶやいていることが多くなりました。時に、天井を見て笑い出したり、手をヒラヒラさせたりすることもみられるようになりました。

3歳すぎの春先から保育園に通うようになったのですが、園では相変わらずひとり遊びが目立ち、集団活動にはまったく興味を示さなかったそうです。園の方から問題を指摘されて、両親も心配になり、4歳0ヵ月、近所の人の勧めで私のところに受診となりました。

子どものアンビヴァレンスはどのように推移したか

SSP で E 男にアンビヴァレンスが強く認められたのですが、経過の中で明らかになったのは、このアンビヴァレンスが母親との関係の中で増強や消退を繰り返していることでした。E 男のアンビヴァレンスを単に子どもの特徴として指摘することはできず、〈子-養育者〉関係の中で捉える必要があることを強く感じさせました。具体的にどのような要因が関係しているかを経過の中で検討していくと、以下のことが分かってきました。

最初から母親はいつも E 男が自分にもっと甘えるようになることを願っていると語っていました。初期、私の介人により母親の E 男への侵入的な関与が影をひそめることによって、一時的に E 男の甘えははっきりと出るようになっていきました。そのことを母親はとても喜んでいましたが、次第に、母親が E 男の動きに余りにも調子を合わせすぎることが気になってきました。それは E 男にとっては母親のペースに巻き込まれる不安を引き起こしたように思います。母親は子どもの一挙手一投足を取り上げて過度に褒めるようになっていったのです。ますます E 男の不安は強まっていきました。ついには E 男は母親に直接向かって「イヤ!」とはっきり口にするようになっていきました。

このように母子関係が変化していく経過をみていくと、E 男は甘えたい気持ちを抱きつつも、母親に取り込まれることによって自分が無くなる不安を抱いたのだということがよくわかります。そのために、E 男は母親の関わりに対して拒否的態度を示し、過度に自立的に振る舞わざるを得なくなったのだと思います。それは母子二人にとってとても痛ましい姿でした。こうしてみると、E 男が母親に対して甘えたくても容易に甘えられないのは、単に子ども自身のアンビヴァレンスゆえではなく、母親の関係の中でアンビヴァレンスが生まれているからだということがよくわかります。

母親にみられるアンビヴァレンスとその起源をめぐって

そこで問題となったのは、なぜ母親がこれほどまでに（無意識に）E 男を自分のペースに取り込もうとしたのかということです。このことについても母子関係の変化の過程で明らかになっていきました。

ひとつには、E 男の甘えを受け入れることによって、E 男のわがままな自己主張が歯止めをなくしてしまわないかという不安が母親に生じていました。

その後、母親は E 男を過度に褒めて自分の願う方に E 男を引き込もうとするまでになっていきました。そうした母親に対して、E 男は激しく拒否するようになりました。その結果、母親に見捨てられ不安が起こっていったのでしょうか。母親との面接の中で、その背景に母親自身の子ども時代の被養育体験が深く関係していることが浮かび上がってきたのです。子ども時代に自分の母親の期待に応えることで褒めてもらうという体験が自分で母親になった時に子どもとの間に再現していることが明らかになってきたのです。母親の子どもに対して抱くアンビヴァレンスが自分の子ども時代の母親との関係に起源をもっているということがわかってきたのです。

子、養育者のアンビヴァレンスを
いかにとらえて介入するか

つぎに親子のアンビヴァレンスをどのように捉えて介入したらよいか、幼児期の事例を示しながら考えてみたいと思います。

F 男 3 歳 10 ヶ月 自閉症

自閉症ではないか、どのように接したらよいか教えてほしいとの両親の希望で受診された事例です。

周産期、特に異常はなく、満期正常分娩。母乳で育てたかったが、母乳が出なかったので人工栄養で育てた。乳幼児期早期、よく笑ってい

る子だった。抱っこも好きでよく求めてきた。そのため当時は母親として違和感をまったく抱けなかったといえます。しかし、1歳すぎてもことばが出ないことが少し気になり始めたけれども、いつかは出るだろうと思っていたそうです。

1歳半健診で、頭に布を置いた時に布を取り払うかどうかの検査を受けたら、F男は布を取り払わず、検査中、ずっとなされるがままで、まったく抵抗を見せることはなかったのを見て、おかしいなと一瞬思ったそうですが、当時行きつけのホームドクターからは大丈夫でしょうと言われたので、そのままにしていました。

2歳過ぎても、名前を呼んでも振り返らないのが気になり始めました。しかし当時、姉の中学進学受験で母親は忙殺されていました。毎日姉の塾への送迎をしたり、勉強の手伝いをしたりして、姉の受験勉強にエネルギーを注いでいました。幸いF男はおとなしくて手がかからなかったため、それを良いことにあまり彼には手をかけませんでした。2歳頃から同じ年頃の子どもを怖がるようになり、さかんに同じことを繰り返すようになりました。ことばの遅れもみられ、気に入ったせりふばかり口にするようになり、要求はクレーン現象のみであったそうです。

3歳、幼児教室に通い始めました。そこで担当者にコミュニケーションがおかしいですね、と指摘されたそうです。母親はそれを聞いて大変驚いたそうですが、その時は半信半疑でした。しかし、父親はそれ以前から気にしていたそうです。そのため、両親はF男のことをめぐってよく言い争いをしていました。まもなく、子ども福祉センターに出かけたところ、そこで自閉症といわれました。早速週1回の療育を受けるようになりました。

3歳半、ことばが出始めましたが、独り言で同じフレーズを繰り返すことが多く、会話にはなりません。その後まもなく私の外来を受診してきました。

初診時の親子の関わり合いの特徴

家族そろって診察室に入ろうとすると、F男は少し嫌がっていました。でもまもなく親と一緒に入室することができました。診察室の雰囲気ですり落ち着き始めると、部屋に置かれた玩具を手当たり次第に手に取って扱い始めました。すぐに母親の方に視線を向けて、顔色をうかがうようにして手に取った玩具を扱うのをやめます。玩具の方に行ったかと思うと、すぐにソファに座っている母親の方に戻ってきます。そうかと思うと、また母親から離れて玩具の方に行ってしまう。そして、再び母親の方に戻ってきます。このようなことを繰り返していました。母親はソファに座ったまま遠くからF男にさかんに指示的なことばを掛けていました。

母親に対する強いアンビヴァレンス

母親に構ってもらいたい（甘えたい）という気持ちが強いことがとても感じられるのですが、なぜか母親に近づいてはすぐに離れてしまっていました。強いアンビヴァレンスが感じ取られたのですが、それを強めている要因のひとつに、母親のF男の行動に対する過敏な反応があると思われました。F男がなにかしようとする時、母親は、他人様に迷惑をかけないかを気にするあまり、すぐに注意しています。そんな母親の反応が彼には突き放されるような感じを抱かせたのではないかと思われました。容易に母親には近づけない状態にあったのでしょう。

それでも、F男がさかんに母親の顔色をうかがう行動を見ていて、母親を頼りにしているサインとして肯定的にとらえることができました。さらには、F男の表情を見てみると、時に恥ずかしそうに、うれしそうに、嫌そうにと、F男の気持ちがこちらに伝わりやすいことも感じ取ることができましたので、そのことも母親に伝えました。私はF男の気持ちの動きを代弁しながら母親に説明していきました。

F男は私のそばにもよく接近しますが、こちらが抱きかかえようとする時、激しく拒否して、

身体を固くして抵抗を見せました。それでも何度か試みているうちに、F男の身体は次第に柔らかくなり、抵抗は薄れていく手ごたえを感じました。しばらくは先ほどの母親に対して見せたように、私の方に接近しては離れることを繰り返していました。

両親との話に熱が入っていた時でした。F男はひとつの小さな積み木を手に持って、父親の頭にそれを乗せようとしたのでしょうか、父親の方に近づいていきました。母親はそれを見てすぐに〈だめでしょ!〉と強い調子でF男に注意していました。

母親との面接から、母親はこの1年間姉の世話ばかりしていて、F男を放っておいたことに強い罪悪感を持っていることも語られるとともに、自分の育て方が悪かったから、F男がこうなったのではないかと自責感も強いことが感じられました。

両親への助言

そこで私は次のように両親に助言しました。まずはF男が母親の方に近づいては離れていくことを繰り返す行動の意味を、F男には母親に対して構ってもらいたい気持ちがとても強いけれど、いざ近づくとなぜか不安や緊張が高まり離れていく気持ちになっているのではないかと説明し、そんな心理状態(アンビヴァレンス)が強く働いていることをわかりやすく述べていきました。その際、F男の母親に対する強い思いを肯定的に取り上げ、強調しておきました。さらに、「自閉症だから〜だ」と一般的な自閉症理解に自分の子どもを当て嵌めて理解するのではなく、F男が示すいろいろな行動が彼のどのようなころの動きを反映しているのか、じっくり見ていくことが大切だと強調しておきました。母親には、F男の気になる行動に対して指示的な働きかけを控えるように心がけていきましょうとも助言しました。

母親は頭ではわかっている、F男の遊ぶ様子を見ていると、どうしても口を挟みたくなる

衝動に駆られてしまい、なかなか子どもの様子を見守るゆとりはもてませんでした。F男は次第にのびのびと遊ぶようになっていったのですが、母親の干渉は収まらないため、F男は強い口調で〈いや!〉とはっきり口に出すようになりました。母親はさらに落ち込むようになりました。母親は明らかにうつ状態を呈するようになりました。最初は抵抗があったのですが、しばらくすると、母親の方から薬を飲んでみようというようになり、薬物療法が開始されました。

すると、少しずつ母親の肩の力が抜けてくるのがわかりました。自分の心の内や家族の心配事などを私に自分から話すようになりました。その中でとても印象的なことが語られました。

母親の子ども時代が想起される

両親と私、3人で旅行した時はまるで「強化合宿」みたいだった。予定通りの行動をするようにいつもせかされていた。周囲の人への気遣いからではあったが、つねに他人に迷惑がかかるから、早くしなさいとせかされていた。勿論、私たちのためによくやってくれていたと思う。父親は家族思いだが、周りの人たちに気を使い、旅行の時には予定をびっしりと決めて出かけ、少しでも予定に遅れそうになると、私たちをせかしていた。だから私たちにとって家族旅行は「強化合宿」のようなものだった。ゆったりとリラックスして楽しむようなものではなかった。父親がいると背筋を伸ばしていないといけないうようで、いつもびりびりしていた。

母親がF男の行動を見ているとなぜか急かしたくなるのは、このような自分の育った背景も関係していることに気が始めました。母親自身も自分の親に対してアンビヴァレンスの強い子ども時代を過ごしたことが明らかになってきたのです。

母子間の関係の深まりを感じさせる印象的なエピソード

2カ月もすると、母親に少しずつ落ち着きが

感じられるようになってきました。すると、母親は子どもの言動の意味に独特なものがあることに気がつき始め、うれしそうに語ってくれるようになりました。

たとえば、こんなエピソードです。

二人で外出していた時だった。F男がさかんに母親に何か言っているのだが、それが分からなくてどうしてよいか困っていた。先日から〈お弁当屋さん、丸くなった〉とさかんに私に言っていたことを思い出した。即座には分からなかったが、その店の看板が変わっていることに気づき、その看板が丸くなっていたというのである。F男はそのことを自分に伝えたかったのだとその時初めて気づいた。それが母親にも分かり、とてもうれしくなった。F男にそのことを言うと、にっこりしてうれしそうに反応した。

このような感動的なエピソードを、まるで子どものように、素直に、うれしそうに私に報告する母親の態度がとても印象的であった。このことが契機となって、母親もF男に合わせて遊びに参加しようとする積極的な姿勢が見られ始めました。F男の何気ない行動の背後にいかにかF男の気持ちが反映しているか、母親は次第に深く理解することができるようになっていきました。

このように母子関係がふかまっていったのですが、3カ月をすぎた頃の面接の中で、つぎのようなエピソードがありました。

甘えてくるF男に思わず遊びを誘う母親

一緒にセッションに入っていた男性スタッフとF男が遊んでいましたが、しばらくして突然F男が母親の方に接近して、頭を膝の上に突っ込むようにして飛び込んできたのです。その時すぐさま母親はF男を抱いてやったのですが、まもなく遊戯室の左奥にぶら下がっていたサンドバック（ボクシング用）が目に入った

ので、母親は急にF男に向かって〈あれ（サンドバック）にバン！と叩いてきて！〉働きかけたのです。するとなんとF男はすぐさま母親の言われたように、サンドバックの方に行き、叩いたのです。

この時私はとても驚きました。F男は（アンビヴァレントながらも）母親に甘えて接近していったのです。たしかに、母親は一時F男を受け入れたのですが、すぐさまF男を他の遊びに誘うことで、彼の関心を他のことに引き寄せようとしたのです。なぜこのような行動が叱咤に現れたのか、そのことをすぐにその場で取り上げ、一緒に考えることにしました。F男がせっかく母親を求めて接近し、勢よく抱きついてきたのです。それにもかかわらずなぜ母親はF男の気持ち（甘え）をしっかりと受け止めることができなかったか、そのことを考えることにしたのです。

するとすぐに、母親は以下のことを語り始めました。自分の父親が仕事人間で休みなく働いていた。そんな人だから、自分がのんびり何もしていないということは耐えられないのだろう。自分もそんな父親の影響を受けている。ついこのような対応をしてしまうのはそのためだろうと述べたのです。この時の母親は深く感じ入ったようで、そのしみじみとした語りは私の心にも深く響いてくるものがありました。

このようなエピソードを重ねることによって、母親はF男の日頃の言動の意味を感じ取ることが容易になるとともに、そのことをF男に伝えることで二人の関係は急速に深まっていったのです。

母子の微笑ましいエピソード

1年後、母親が次のようなうれしいエピソードを語ってくれました。

ある日、保育園の活動で紐通しの時間がありました。紐と輪（リング）を使って紐通しをや

ることになりました。F男はすぐに熱中し始め、母親はそばですっと見ていました。すると時折独り言のようにして「スーパーポンパー（特殊な遠距離送水車の通称、地下道に大量の雨水が入ってしまうなどの都市型水害に対する排水を目的として作られたもの）」とつぶやいていました。母親はすぐにF男が好きな消防車のホースを巻き取って遊んでいるんだなと気づいたそうです。まもなくその活動の時間が終わって、担任がみんなに「紐通しは終わったので、紐を返して下さい」と指示しました。みんながすぐに紐を返しましたが、なぜかF男だけはいつまでたっても紐を返そうとせず、扱い続けていました。担任がなんどもF男に向かって「F男ちゃん、紐を先生に返して下さい」と言っていました。F男は無視するようにして返そうとしなかったため、母親はF男の様子をみて担任の気持ちを察して、自分から「スーパーポンパーのホースを返して下さい」とF男に言ってみようとした。するとすぐさままったく抵抗を見せることなく紐を担任に返したというのです。

この話をしていた母親を見ていて、子どもとどこか気持ちが深くつながっているという自信めいたものを私は感じながら聞いていました。

何気ない言動の背後に働いている ものに着目する

常に私が心がけていることは、子どもの行動を病的なものか否かといった視点から捉えるのではなく、その行動の背後に働いている気持ちに焦点を当てて考えていくことです。子どもはなぜそのような行動を取ったのか、その動因

(動機)に着目し、その意味を考えていこうというものです。その際、とりわけ重要だと思うのは、日頃の何気ない言動の背後に働いているものに着目するということです。なぜなら、それらの言動にはその人の歴史が深く反映しているからなのです。このことはとりわけ養育者を初めとした私たち自身にとってとりわけ重要な意味を持っていると思います。よって、今日の前で展開している親子関係の様相をつぶさに観察するとともに、そこには養育者自身のこれまでの歴史が様々な形で反映しているということにも気づく必要があるのです。なぜなら子ども相手の相手をしている養育者自身も常に子ども時代の自分を重ね合わせながら生きているからなのです。このように他者のこころの動きに焦点を当てながら理解していくという、精神科臨床では当たり前のことが、発達障害を「関係から診る」というこれまでの私の実践を通して実感をもって語れるようになった次第です。

ご清聴ありがとうございました。

なお本論の研究に対して大正大学学術研究助成金（平成21年度）の援助を受けた。

参考文献

- 上居健郎 (2009). 臨床精神医学の方法. 東京, 岩崎学術出版社.
- 小林隆児 (2010). 自閉症のこころをみつめる－関係発達からみた親子のそだち. 東京, 岩崎学術出版社.
- 小林隆児 (2010). 関係からみた発達障害. 東京, 金剛出版.